

平成30年度 自己評価表

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p align="center">学び 輝き 感動のある学校</p> <p align="center">幼児・児童・生徒が充実した学校生活を送り、個々の可能性を伸ばし、 よりよく生きることができるようにする学校 《18歳で自立できる人を育てる ～将来を見とおした今のQOLの向上～》</p>	<p>今年度の重点目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 幼児・児童・生徒一人一人が「いきいきと学ぶ」教育に努める。 2 保護者の願いや地域の期待に応える。 3 幼児・児童・生徒の健康と安全を守る。 4 センターの機能を推進する。 5 開かれた学校を推進する。
---------------------------	--	---

		年 度 当 初			評 価 結 果 () 月		
評価項目	評価の具体項目	現 状	目 標 (年度末の目指す姿)	目 標 達 成 の た め の 方 策	経 過 ・ 達 成 状 況	評 価	改 善 方 策
一人一人が「いきいきと学ぶ」教育の充実	幼・小学部 確かな根拠に基づく支援や学習の充実	<ul style="list-style-type: none"> ○一人一人の子どもたちと向き合い教職員で実態や課題を共有しながら、学習を積み上げることができた。さらに新学習指導要領を基に、研修を深め学習の精度をあげる必要がある。 ○医療的ケアを必要とする超重度や病弱の児童が増え、障がいに応じた支援や学習を精選する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○新学習指導要領を基に研修を深め、障がいや発達段階に応じた学習が行われ、学習の内容や教材の精度が上がリ、根拠のある学習ができています。 	<ul style="list-style-type: none"> ○新学習指導要領について、読み深めたり他校の実践例を集めたりしながら、根拠のある学習について研究を深める。また、日々の授業について振り返る時間を設け、共有できる時間を意図的に設ける。 ○障がいに応じた必要な環境を、学部内で協力し合いながら整備する。また、より良いと思われるアイデアを出し合い、日々の改善に努める。 			
	中学部 主体的に取り組む力を育む教育の充実	<ul style="list-style-type: none"> ○授業について教師間で情報交換ができるようになってきた。授業や行事において生徒は力をつけてきているものの、受け身になりがちな現状がある。授業や行事、さらには生活に対してより主体的に取り組む力を育てる必要がある。 ○生徒の課題や目標について検討を重ねてきたが、家庭や地域生活での課題が学校での学習目標により反映されていく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「わかった」「できた」と生徒が実感することができるよう授業改善を行うことができている。また、役割を意識した活動や人との関わりを充実させた行事や体験活動を設定することができている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○支援方法や指導内容についてそれぞれの教師がもつ課題を出し合い、授業改善に向け複数の教師で検討・共有する機会をもつ。 ○行事や体験活動では、生徒が主体的に取り組むための視点を持ち、学習グループや担当者で計画をたて学部でも検討する。 ○学校生活における実態把握のほか家庭からの情報を収集し、目標の妥当性や指導内容等について月に1回、学習グループで話し合う場をもつ。進路体験の前後には、学習グループに加え、学部全体で見直す機会をもつ。 			
	高等部 自立した生活に必要な学習の充実	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒一人一人の自立のイメージ、卒業後の姿の捉えに違いがあり、指導内容や支援にブレを生じることがある。 ○生徒が、自己理解を深め自分の課題に気づいたり目標に取り組んだりする主体性を、十分に引き出せていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○何につながる指導や支援であるのか、検討会、事例研等で指導の方向性を絞り込み(合意形成)、チームで取り組み生徒の自立度を高めている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○一人一人の生徒の自立した生活や卒業後の姿について共通理解を図るためにグループや学部の時間を設ける。 ○指導力の向上のために、学部研修を企画し行う。 ○指導内容の工夫や改善、支援の精選を図る。 ○卒業生から学んだり、自分の考えを伝えたり、実践的に学んだりする体験学習の充実を図る。 			
	教務課 障がいの実態に応じた教育課程の編成	<ul style="list-style-type: none"> ○今年度より義務教育に病弱教育が設置された。また病弱教育の分校も設置され、これまで以上に幼児児童生徒の実態の幅が広がった。それに伴い、より障がいの実態に合った教育課程の検討が必要である。また、新学習指導要領の内容について周知していくことが急務となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○新学習指導要領に基づき、障がいの実態に合った教育課程が十分に検討、編成されている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○夏季休業中から学部、グループごとに検討ができるように、会の日程調整を行う。 ○教育課程編成説明会の内容を全体に周知し、検討事項を確認していく。昨年度からの課題となる教科学習の捉えについて重点を置いて検討する。 ○研究・研修課と連携して、新学習指導要領の内容について学ぶ機会を設定する。 			
	情報教育課 生活につながるICT機器の有効活用の推進	<ul style="list-style-type: none"> ○ICT機器を日常生活の一部に取り入れ活用している事例や考え方の紹介や校内の実践事例をまとめ情報提供した。また、校内にあるICT機器の使用方を紹介するとともに、ICT支援事業の授業支援・相談体制の利用促進の工夫をしたことで、生活につながるICT機器の活用を意識した取り組みが行われるようになってきたが、新転入職員も含め理解を深める必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○生活につながることを意識したICT機器の活用方法についての情報提供や相談への支援がなされ、生活場面につながることを意識した取り組みが行われている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○生活や仕事にICT機器を活用している事例を動画も交え紹介し、職員間でICT機器を生活で活用する姿を共有できるようにする。また、校内で行われているICT機器を使用した取り組みを事例として取り上げ、生活につながる視点とつなげて紹介する。 ○ICT機器を活用しやすい環境整備と支援体制に努める。 ○ICTサポート支援事業との連携を密にし、活用する。 			
	進路指導課 キャリア教育の推進と進路指導の充実	<ul style="list-style-type: none"> ○キャリア教育の基本的な考え方については、昨年度までの2年間で定着してきた。引き続き、幼児・児童・生徒・保護者のニーズをもとにキャリア教育の視点で学習活動を見直すとともに、新転入教職員も含めて本校の進路指導への理解を深める必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○8割以上の教職員が、キャリア教育の視点でつながりのある学習活動が各学部間で実践されていると感じている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○今年度の課題や次年度の展望に沿った進路研修会を企画、運営する。 ○系統性や連続性を意識した指導ができるように、キャリア教育の視点で授業や学習活動を見直す機会を持つ。 			

様式2

研究・研修部	主体的・対話的で深い学びを育む授業づくり	○校内研究は3年計画の2年目であり、昨年度は各学部ごとに目指す子どもの姿の共有ができた。 ○「主体的・対話的で深い学び」の捉え方の理解を図る必要がある。	○学習指導要領の視点から、学習の目標を立てたり、「主体的・対話的で深い学び」を育む授業を検討したりする校内研究が行われている。	○アドバイザー派遣事業で「主体的・対話的で深い学び」の捉え方の考え方や授業づくりに関する研修会を企画する。 ○「主体的・対話的で深い学び」のある授業づくりにつながるよう、各学部ごとに授業者シート、授業参観シートを活用した授業公開を実施する。 ○教師個々が自己の実践をChallenge!シートにまとめたものを紹介したりファイリングしたりする。			
	育てたい資質・能力を明確にした指導	○年間指導計画に基づいて授業は実施されているが、子どもたち一人一人の育てたい資質・能力との関連づけは十分ではない。 ○年間指導計画のチェックリストの評価を年度末に1回だけ行うため、子どもたちの変容が客観的に捉えにくい。	○子どもたち一人一人の実態に即して、育てたい資質・能力を明確にした指導がなされている。	○年間指導計画のチェックリストの評価を学期末毎に各学習グループで行い、達成状況の共通理解を図り、達成のための方策を立てる。 ○人権教育参観日の公開授業について、保護者(来校者)アンケートを実施し、今後の指導に活かす。 ○公開授業の振り返りを各学習グループで行い、実践記録を作成し、授業改善に活かす。			
きこる・専門性に対する対応	自立活動部 専門性向上研修の活性化	○障がいの多様化と重度化の中で、障がい特性や子どもの発達段階を理解した上で実態把握をし、明確な根拠をもって指導できる専門性の向上が急務である。専門性向上のための研修を一部の教員が担っている状況があり、説明できる教員の育成が必要である。	○専門性向上のための校内研修の講師を10名以上の教員が担当し、指導に活かせる実践的な研修だったと事後アンケートで評価した教員が80%以上になる。	○中核教員や県外出張をした教員、外部講師から指導を受けた担任等が学びを活かして研修会の講師を務める。 ○指導に活かすことができるよう、実技研修・演習など内容の活性化を図る。			
健康と安全の確保	保健指導課 安心安全な学校を目指す体制づくり	○危機管理に関する研修や訓練を実施しているが、緊急対応マニュアルの見直し、研修及び訓練の積み重ねにより、危機管理意識の向上、維持が必要である。	○各種緊急対応マニュアルが改善されているとともに、教職員の危機管理意識が向上し、緊急対応に備えている。	○緊急対応時における流れや役割分担を見直し、マニュアルに明記する。 ○学校医等による病弱児研修、エキスパート教員による摂食指導研修、外部講師による窒息事故対応訓練、不審者対応訓練を実施する。			
機能の向上	教育相談課 病弱特別支援学級への支援の基盤づくり	○今年度から本校が西部地区の病弱教育のセンター的機能を担う。 ○地域の病弱特別支援学級設置校数、児童生徒の実態等、全く把握していない。	○病弱特別支援学級のある全小中学校にセンター的機能の情報提供ができています。	○西部地区の全病弱特別支援学級(11校)へ訪問する。 ○担任研修会や相談活動を通して、地域の病弱特別支援学級の児童生徒の実態を把握する。			
学校の推進	戦略事業部 魅力ある学校行事の企画	○皆生ブライト・フェスティバルでは多数の来校者があるが、本校生徒の実習体験先を依頼するため、企業開拓等で訪問すると、本校のことを知らない地域の方々に会うことがしばしばある。 ○西部地区にある他の特別支援学校と間違えられることがよくある。	○魅力ある学校行事を企画し、幼児・児童・生徒がいきいきと活動している姿を多くの方に知ってもらう。	○学校のホームページ等に記事や写真を掲載したり、地域の公民館等へチラシを配布し、来校して頂く様に呼びかけを行う。 ○広報的活動を行ったり、雑誌の掲載等の要請に積極的に応じる。 ○アンケートをとり、今後の行事にいかす。 ○幼児児童生徒が体験したことがない活動を用意したり、人前で発表したりする機会を増やす。			
その他	総務課 時間外業務の削減	○毎日勤務時間終了後、1時間以内で退勤する者もいれば、毎月2700分以上の時間外業務を行う者もいる。 ○時間外業務の多い教職員は、ほぼ固定化している。 ○働き方改革に伴い、働き方の見直しが求められている。 ○会議の精選、業務の見直しの観点から、昨年度末、校務分掌組織を再編し、今年度新たな組織で活動している。	○時間外業務の時間が一人あたりの平均時間が前年度比10%減になっている。	○自己の働き方を見直す為の意識改革を行う。(勤務簿の自己管理、退勤時刻の意識づけ) ○時間外業務をしない日(ライトダウンの日)を月2回設定し、状況によっては増やしていく。 ○事前に資料等メールで送付するなどし、会議のスリム化を図る。 ○各分掌部長・課長を中心に分掌業務の見直しを図る。			
	事務室 教育環境及び学校施設の適切な管理	○老朽化による施設・設備(備品等)の修繕箇所が増えてきており、安心安全な教育環境の整備及び特色ある教育活動の支援のためにも中長期的な改修等が必要である。	○予算の効率化・重点化を推進し、健康や安全に配慮した教育環境の整備を図る。	○効率的な予算執行により、中長期的に学校財務基盤を安定させる。 ○業務改善をはかり、計画的な予算執行に努める。			

評価基準 A:十分達成 [100~80%] B:概ね達成 [80~60%程度] C:変化の兆し [60~40%程度] D:まだ不十分 [40~30%程度] E:目標・方策の見直し [30%以下]